

研究

龍溪矢野文雄先生 (二)

生伯史談会

賛助会員 山内 武 麒

慶応義塾に学ぶ

東京に引移つた矢野先生一家はまず藩邸に落着いた。藩邸は今の芝区愛宕下二丁目にあつたが、父の任地下総とは近いので、先ず此処に落着いたのである。

先生の東京移住はいまでもなくその生涯の一大転機であつた。しかし、先生はおせらなかつた。維新の風雲に乗じて、早く官職にありつこうとするその頃の青年の氣に焦躁することなく、讀書に耽つて徐ろに他日の大成を期してゐた。そして漢學者田口江村の門をたたいた。

田口江村は備前の人で、江戸に遊學し、後には幕府の儒官に登用された俊才で、古學派の漢學者であつた。當時、いわゆる洋學が潮の如く押し寄せていたのに、なお儒學の一私塾にこまつて、雄々しく東洋思想を鼓吹してゐた。

放歌高吟し、高下駄をからこると高鳴らせながら、長刀をたばきで大道を闊歩するものが當時の書生風俗であつた。塾日本所四丁目にあり、愛宕下の藩邸から二里近い道を徒歩で通つていたが、往復に時間をとるので塾に寄宿することにした。

その頃、この塾で用いた輪講の書は「孟子」であつた。

輪講廻読の時は、田口先生が正面に控え、講義を望む者の中から五六人を定め、抽籤で順番をきめて、順次に塾生一同の前に出て演義を述べた。一わたりそれが終ると一同から講演者に質問し、中には異論を出して論争することもある。最後に先生から議論についての批判があり、教義をよえちという風であつた。その当時の塾生は百人を越すといわれていたので、中々活氣に充ちた愉快な輪講会であつたらしい。こゝした席でも文雄先生の學力に遺憾なく發揮され、塾頭が匹敵する外、先生は太刀打ち出来るものは一人も無かつたといふ。

この頃の漢學私塾に於ける塾生の日常は、實に放縱豪快を極めていた。維新直後のことであつたから、一度風雲に乗ずれば、明日は御相參議の深位に就くことができると信じ、その上、戦争の余波をうけて殺伐の氣がみなかり、書生はみないねいねの豪傑氣になり、大道を肩で風切つて横行してゐた。矢野先生にはこんな漢學私塾の氣風が肌にならなかつた。先生が漢學を修めるのは単なる漢學者にならうとするためではなかつた。その目的は政界に乗り出すにある。それで先生が最も關心が深かつたのは、政治上の諸制度を知ることであつた。けれども先生のやうした希望は、漢籍を讀んでも達せられなかつた。不満であつた。「伊藤東涯の制度通などというものがあつたが、元來支那の制度は、多く昔風のもので十分行届いていない。また近世のものを書いたものも少ない」と不平不満であつた。

ちやうどその頃、弟武雄が藩の貢進生として大学南校(昌平黌)に入學した。南校の洋學の教科書をみると、政治制度のことがびっしり書いてある。これを見れば先生は非常な刺激をうけた。漢學塾はもう時代おくれだ。自分も洋學を專修し、これによつて志と伸べようと決心し

た。先生の洋学研究は一朝一夕の出来心ではない。前記したように、父光儀は西洋の文物制度に深い興味をもち研究していたので、先生もこの感化で幼い頃から西洋の叢書を読んだり、西洋数学ぐらゐは知っていた。洋学をやろうという心は、よほど以前から萌していたのである。

洋学研究を決意した先生は「大志といへば廢念義塾がよからう。福沢諭吉の名は天下に表れている」と心にきめて、遂に明治四年（一八七一年）の春、先生二十一才にして、漢学塾から英学塾として最も有名であった廢念義塾に移り、福沢諭吉の薫陶を受けることになったのである。先生が入学したときの廢念義塾は、芝の新鐵座におつたが、入学後三四か月して今の三田の高台へ移つた。旧島原藩の藩邸を引渡けたもので、御殿や書院とそのまま教場にして、畳は日本机で、才木椅子やテーブルはなかつた。古長屋を買つて寄宿舎にしてゐた。このように洋学塾といつても、書物の外は何もかも日本風であつた。しかし、塾生はようやく三百名ばかりであつたが、それでも私学の中では断然多かつた。

塾は近代的教育で、色々の規則が設けられていて、中々嚴重であつた。違反者はピシピシ処分された。深更福沢先生自身が見廻り、若し十二時以後、規則に反して点燈し、読書している者が見つかるとその場で叱り飛ばしたという。月謝は僅か一月であつた。月謝と食費その他雑費を合せて、一人分月五六圓もあれば不足のない学生生活を送れる時代であつた。

矢野先生は父から毎月学資として八圓づつもらつていたので、いささかそこゆとりがあつた。先生はそのゆとりで藤田茂吉を助けることとした。

藤田茂吉は先生と同郷佐伯の人である。先生より二つ

年下であつたが、同じく橋本藤先生の下生である。將來を希望する秀才であつたが、家が貧しく、上京して洋学を學べず佐伯にくすぶつてゐた。「この偉材を空しく田舎に朽たせぬに忍びぬ」と考へた先生は、入塾した年即ち明治四年の冬、手紙を送つて藤田の上京を促した。青春の覇氣に燃ゆる藤田は、早速意を決して妻を勇んでやつて来た。そこで先生は自分の学資をさし、藤田を廢念義塾へ入れた。

しかし、月八圓ではよほど節約しなければ二人を斯うこゝろで養ふことが出来ぬので、先生は塾の寄宿舎を出て、うすぎたない安二階を借りて、二人で自炊生活をはじめた。八圓の中から二人の月謝を引くと、残り六圓で調代から二人の食費や小づかいまで一切を賄ふにせねばならぬ。いくら物価の安い頃であつても随分苦しかつたであらう。二人は生魚などを喰ふと口がさびたことばなく、干魚や乾物に菜葉ばかりですましてゐたという。こゝろした苦勞を一つづけること一年あまり、そのことが父光儀の耳に入つた。父は二人の志を察して、更に藤田のために幾分の学資を支給することにしたので、二人は再び塾の寄宿舎に帰ることができた。

こゝでちよつと藤田茂吉のこゝろにふれておく。藤田は先生より二才年少で、嘉永五年（一八三二年）佐伯藩士林平四郎の三男として生まれ、その親戚の藤田家を嗣いだ。少年の頃からその天稟の学才を認められてゐた。矢野先生の援助をうけて廢念義塾に学び、新聞界に入つて、その識見と非凡な筆力以て世の人々を驚かせ、報知新聞の主筆として活躍した。また鳴鶴と号して「文明東漸史」や「済民偉業録」などの著書がある。

藤田は、前記述べた矢野先生の友情を長く徳とし、自分もできる身分になつたら、貧乏の後輩を勉強させぬ

ならぬと、その恩に深く報ゆることを考えていた。その一人に犬養毅がある。彼が報知新聞の主筆になると、早速、貧乏書生犬養毅を居候におき、報知新聞の寄稿欄に投書させて、小使銭があまりの原稿料をかせがせたので、犬養は何の屈托もなく義塾に通うことができた。茂吉が上京したとき、矢野先生からもらつたごつごつの黒木綿の羽織一といつても多分ようかん色をしていたと思つたが、犬養に譲つたところ、犬養はこれを「三代羽織」と称して、これを一張羅にして、着用することを光栄にしていたという。この話は「十代先覚記者伝」という本に出ている。

その頃の廣心義塾は、生徒を十二の階級に分けていた。十二等から六等までは教師があつたが、五等から一等までの生徒には教師がなかつた。五等以上の上級生は下級生を教えるが、自ら独学研究をしななければならなかつた。各級には春秋二季に試験が行われた。試験は一種の天才教育主義に基ずき、その成績によつては一階に何級でも跳ぶことができた。一級は五六十人であり、まだ五六人づつを一室に閉じこめ、時間を限つて一節の文章を下讀みさせ、順々に一人づつ呼び出しては、その讀み方を試験する。一級五六十人の中から成績優良な四五人を選抜して、更に翌日の上級試験を受けさせる。若しそれが再びその級の試験に優良な成績を挙げて、優秀な五人中に入ると、更により上級の試験を受けさせた。けれども大松りに限りがあり、一度抜擢されたものは、次の級の試験に落ちるのが常である。それもまだいい方である。大多數の者はただ定期昇級で昇級するだけであつた。ところが矢野先生は、一級を昇ると同時に、優秀生として更に上級の試験に加えられるという状態で、春秋の試験毎に、一辺に三級以上昇るのが常であつた。一季

に三級づつ昇ると十二級を了えるのに僅か二年で足りる。先生は入学して二年になつたがならぬうちに最上級に達して、早くも教師として初級の教育を担当した。塾中で皆から矚目されていた。教師となつてからは、自由に研究に専念することができるようになつたので、塾にある憲法や政治制度に關する文献を漁つた。その頃の塾の圖書館は頗る貧弱なものであつたが、それでも英米の憲法史などがあつたので、貪るようになつた。こゝから讀んだ。この頃の日本人で洋書を讀むといへば、洋書、窮理書(理科書)と讀む人があつたが、政治に關するものや憲法史などを手にする人は殆んど無かつたのである。

先生が英書を研究するには、人並ならぬ苦勞を重ねたものであつた。良書は中々手に入りにくく、当時としては、全然、制度習慣を異にし、伝統もちがうし、語原から言葉の組立まで異なる洋書の研究は、並大抵の業ではなかつた。先生は片時と書物を離さず勉強したのである。先生の得意とする英書の翻譯では、塾中に並ぶものがなかつた。山本達雄などもその頃、先生から「英訳憲法史」の講義を聴いた一人である。

廣心義塾の名は全国へ知られて、洋学に志すものが益々多くなつたので、明治七年に大阪に分校をたてた。矢野先生は選ばれてその校長として赴任した。恰もその頃、先生の父君光藏は備中の小田県知事であつたので、よく父君を訪れていた。先生と岡山県出身の人たちとの間に、交友や門下生の多かつたのは、こゝろに因縁によるものであろう。後年文名高かつた森田思軒や、政界の大立物となつた犬養水堂なども皆同県の人である。

大阪に一年余り居て、先生は更に徳島へ移ることとなつた。徳島の有力者が、藩主蜂須賀侯の援助を受け、福沢翁に懇願して、義塾の分校を建てたので、その校長

に転じたのである。先生はここで、民法、刑法及び國際公法から經濟書、また文明史その他各國の歴史書を片端から読んだ。凡てこの頃手に入れた得る政治に関する書籍はこれを蒐集して読んだといわれている。

嘗て先生は、古きから「ある大きな兩替店が小僧を立てる方法」を聞いて大感動したことがある。その話によると、小僧を雇入れた初めの間は、決して不純な金銀類を眼に触れさせぬ。常に品位の正しい純金ばかりを取扱わせる。そうして二三年経った後に、初めて不純な金銀類を取扱わせると、今まで純金ばかりに眼が馴れているから、不純なものはずいぶん見分けがつく、……といふことである。先生はこの話を思い出し「そなた、これこそ目下世の中全般の仕組を研究している自分にとって、一つの大きな教訓である」と感じた。「今の世論は極めて不純である。これに眼をさらすのは徒に心を乱すばかりで、何も得るところはない。苟くも指導的政治家政界の究極者たるものが、現在のつまらぬ政論に煩らわされてはならぬ。むしろ先進國の文献を研究して、お国の諸制度、文物などがどうあるべきか、その本當の姿をつかみ、胸中に一つの完全な世界を組立てて、世に立つて行かねばならぬ」と考えた。

これは明治八、九年の頃で、先生が二十五、六才の時がことである。かように先生は青年期の四、五年間、一貫専心西政の文物の研究に没頭して、日本の新聞、雜誌の論説を読むと、それがおまじりに幼稚稚に見えた。「もうよかろう」と先生は初めて大きな自信の下に筆を執つて、その一二篇を報知新聞に送つた。それが一たび報知の紙上に載ると、忽ち識者の間に注目をひいた。

既に中央に乗り出す準備を整えた先生は、間もなく校長を辞して帰京した。帰京と同時に報知新聞から招聘さ

れて入社した。當時の主筆は先生とかつて苦学を共にした藤田茂吉であった。先生は副主筆として藤田を助け、政界といわず、思想界といわず、文藝界といわず、あらゆる分野に、世の究極者として、リーダーとして眼ざましい飛躍を試みる第一歩をふみ出したのである。

憲政運動に進む

矢野龍溪先生は、政治家肌の祖父と父の感化で幼い時から一人間生れて國家社会のためには一大事業を成し遂げなければ、生れた甲斐がないといつた固い、しかも烈々とした燃えるような決心を抱いていた。その先生が、慶応義塾に学び、更に自ら筆米その他の先進諸國の政治組織を研究するに及んで、遂に民権の伸張と立憲政体の樹立とを、畢生の大事業とするこゝろに至つたのは、極めて自然な成り行きであつた。「幕末に生命を投じて働いた諸先輩は、王政復古と全國統一の事業を成就した。ついで成すべき政界の大業は、いふまでもなく憲法制定と人民の参政である。われわれ青年に与えられた仕事はこれを措いて何かあるか」といふ信念をもち、中央に進出し、新聞事業に携わるようになったことは、大きな意義があつた。

その頃の新聞で代表的なものは、「東京日日新聞」「郵便報知新聞」「朝野新聞」の三紙で、普通大新聞と呼ばれ、政界、思想界の指導機關であると自ら任じていた。この外に絵入り振返名つきで、主として婦女子に読ませる興味本位の新聞もあつた。世間ではこれらも小新聞と呼んでいた。

大新聞の幹部記者は、みな錚々たるつわもの揃ひであつた。「東京日日」には福地源一郎が主筆、赤松謙澄が

副主筆として控えていた。「朝野」では主筆が成島柳北、副主筆が赤松重恭であつた。「郵便報知」はこれらに對峙し、藤田茂吉が主筆として凡てを主宰し、栗平鋤雲がこれを助けて編輯に當つていたが、明治九年（一八七六年）更に矢野先生を副主筆として迎えたのである。

「東京日日」は「大政官記事御用」の看板を掲げ、大政官の記事と載せる當時の薩長政府の機微的性情をもつていた。岩倉具視、伊藤博文、木戸孝允、山縣有朋等の息がかかり、いわゆる漸進主義を主張していた。「わが國に國會を開設するは國論なり」と雖も、先ず民会（町村会）を起し、それより府県会を起し、それよりして國會に及ぶべし。これ漸進論の手段なり。他の直に國會を開設すべしというが如き急進論は危險有害なり」と説いていた。これに反し、「朝野」と「郵便報知」とは民権派を代表する急進論を掲げ、薩長藩閥政府を痛撃して、議會開設漸進論に何等の根柢のないことを説破していった。

「朝野」の成島は諷刺皮肉に長じていたので「雜録」と題して痛烈な皮肉を飛ばしていたが、「郵便報知」は常に筆を世界の犬勢に起して堂々の論陣を張つた。その峻烈な筆鋒は天下の耳目を集め、「郵便報知」は民権運動議會開設運動の急先鋒となつた。社説に筆をとる藤田と矢野先生の名は全國にとどろき、無数の青年たちを讚仰の的となつた。また一面、漸進論者、殊に藩閥政治家及び官僚のめからは、怖るべき一敵國となつたのである。その頃の新聞は、論説をその生命としていた。だから論説記者はその学識は一段高く、新聞界進展のいわゆるパイロットであり、主動者であつた。その頃の新聞の發行部数は、今日とは比較にならないほど僅かであつたが一枚の新報が、一紙を動かす、一村を動かす、一郡一県を動かす大きな力を持つていたのである。當時に於ける

政治思想の向上、憲政運動の促進に尽したの日は、これら論説記者といつても決して過言でない。

龍溪先生は、既に英米の新制度に通ずる第一人者として、その名声を全國に博していたが、進んで朝野の諸名士とも交遊していた。在朝の壯年政治家としては、井上士と並ぶ、ともに遊び、ともに語り、しかも一たび衝突を起せば、井上良一、江木高遠、菊池大麓など、戦しくした友人で、ともに遊び、ともに語り、しかも一たび衝突を起せば、ともに携えて新時代の建設に、一路邁進していったのである。

福沢諭吉はわが國に於ける演説の創始者であり、矢野先生はその最初の企から参加した一人である。先生は新聞界に身を投じてから、一面に於て演説の必要性を強調し、同時に機會ある毎に自分から演説した。福沢翁の關係するものは無論のこと、江木高遠や沼間宇一の合併した演説会にも安と見せた。演説会が立ち上るたびに、「先生も是非」と要請されていた。先生の首題は、大抵立憲政治の樹立が如何に焦眉の急を要する問題であるかを説いていた。若し議會政治が言論政治とするならば、先生がこゝして文章と演説によつて言論の發揚にひとめたことは、立憲政治の地均しをやつたものといふべきであらう。

維新の元勳で、その瀕野におつて民権を主張したの板垣退助であつた。明治八年（一八七五年）廟堂を去つた板垣は、寧ろ立志社の振振に膺心してゐた。彼は立法院と行政府の分離を提唱し、且一自由思想を鼓吹して輿論の喚起にひとめたが、この民権論に共鳴するものが次第に現われて相呼応し、板垣の傘下に集つた。しかし板垣には言論機關がなかつた。然るに當時「報知」が民権論の先駆として立憲運動に奮闘していたので、板垣は「報知」の社員と親しくなり、矢野先生と「眠熟」の間柄と

なつた。

龍溪先生は分ように板垣並にその一派と交友關係があつたので、時には板垣の持論と「報知」に載せていた。「我が國の政治家の通弊は、人民を御し易くしようとするところにある。これをたとえると馬である。馬を御し易くしようとして、体を衰弱させれば、乗手は御し易くなるであらうが、競争には役が立たない、御しにくい馬であればこそ、競争の時相手を勝つことが出来るのである、自分たちを御し易くしようとして人民を無気力にしたら、列國との競争に負けてしまう。」というのは、板垣が誰にも説いていふ説である。これを先生は「報知」に載せた。かように先生は板垣一派を支援し、「報知」を通して陰に陽に助勢していた。

しかし、先生はこれらの人々とは直接行動を共にしなかつた。これら土佐派の連中は、やれもすれば薩長を目的にして反対していたが、先生はそれと喜ばずかつた。先生は常に公正であつた。ただ自分が國に憲政を布き、民権を伸張することを唯一の目的として、少しの他意もなかつた。無論薩長を意にせず、むしろこれを感化して、自分の所信に近づけて、主義主張に賛同させて、一日も早くこの大業を成就させたいというのが先生の念願であつた。目指す第二の薩新は、すべての封建的思想を超越し、あらゆる恩怨を云々せず、公子に打ち立てるべきものだと深く信じていたのである。

ここで横道にそれるが、先生の号「龍溪」についてその由来を記しておこう。これは前記した「西遊漫記想起録・隨筆雜纂」の中に出てゐる。

佐伯湾にそそぐ因尾川（番匠川）を一里あまり遡ると、大小の諸山逶迤として崩濤の如く高低参差、流れて海辺に走る。平野あり、田畝あり、銀色の溪流、廻

旋として其間を走る。」景勝の地「龍溪」がある。「溪流清冽、深潭底を知らず。神龍の家する所、故に此名あり」とある。

この地をよつたもので自らいつてゐる。しかし、番匠川流域に「龍溪」というところは知らない。この文から察すると、龍巖寺の觀音剎近辺であらう。

龍溪先生が朝野の少壯論客ととも、立憲運動に余念がなかつたとき、はしなくも西南の亂が勃発した。時は明治十年（一八七七年）二月であつた。西郷の名を慕うもの、あるいは新政府にこころよからざるものが、各地から呼応して今にも叛旗をひるがえそうとする萌しがあり、物情騷然たるものがあつた。かかるとき、当時二十才台で、しかも日頃から藩閥政府に脊を向けていた龍溪先生は胸臆のひそむ、革命志士の熱血が湧き出でずにはいゝなかつた。

先生はひそかに思つた。「万一にも西郷がゆくゆく官軍を破り、遂に東上するやうなことがあつては、それこそ天下は麻の如く乱れるであらう。然るときは、この機会に於て、まず東京を自治の自由都市とし、またかモドイツのハンブルヒのやうな自由体たらしめなくてはならぬ。そうした上で、さらに撒き全国に飛ばして國人を奮起せしめ、わが政府をして國會を開くまでに進展せしめなくてはならぬ。」と東京府人による自衛協會の構想を立て、沼開守一にその胸中をうちあげた。日頃から大胆で謀叛気の強い沼開のことだから即座に同意した。二人は手分けして府下の徳望家や知名士を誘つて賛同を求めることにしたが、先生は慎重であつた。先生は沼開に更めていつた。

「この事は天下麻の如く乱れる場合に臨んで決行するべき計画である。天下乱れるか否かは、薩軍がどこま

で進出するからよってきまる。もし薩軍が馬関海峡を渡つたならば、到るところに浮たすものが続出して、政府は鎮圧が出来ないであらう。薩軍が馬関海峡を渡るかどうかは、薩軍が熊本城に向つたとき、司城を守る鎮台官軍が城に拠つて守るか、城を出て戦うか否かによつて決せられる。もし官軍が城に拠つて守つたら、攻城兵器に乏しい薩軍では、とても一か月二か月はこれを抜くことは出来ない。その間に、官軍の援兵が必ず来るであらうから、薩軍はきつと敗北するであらう。これに反して、鎮台兵が城を出て戦うのであつたら勝利は薩軍のものであらう。つまり、熊本鎮台がどちらをとるかで、我々の態度をいかにすることにしよう。と、沼間はこれに対して「いや躊躇することはない」といつた気色で、

「僕は土佐で練兵の教官をやつていたから、土佐人の気象や性質はよく知つてゐる。今熊本城にゐる谷干城は、どつこしていて城を守るような人間ではない、彼のことだからきつと城を出て応戦するに違いない。」
 というから、先生はなお念を押したが、沼間は「僕の觀察は漸じて狂いが無い」と自信をもつて答えるので、いよいよ運動を開始することにした。

龍溪先生は先ず福沢翁を訪ねて、さしあたり、東京府氏による自衛協会を組織する必要があることを細やかに述べると、

「自分は自分の性質として、さうな直接行爲をすることを好まない。そんな血なまぐさいことは余り感服せぬ。」

と、ていよく拒絶された。次に民権論者陸奥宗光を引き入れようとしたが、陸奥も二の足をふんで不同意の色を示した。沼間の方もやはり不肯意であつた。二人は屢々

ず諸方面を走り廻つたが、徳望家や知名士といつた連中は、いざれも尻ごみして、中々忘じようとはしなかつた。しかし、少壮論者の中には相当賛成者があつたので、まず第一回の会合を開くことになり、二人が主催者となつて通知状を出すと、二三十人の同志が集つた。「若しいよ、よこの協会が實際運動を開始することになれば、名を自衛協会ということにしよう」と決定し、次いで二三の同志が演説をした。その中に先生の注意をひいた一人の青年があつた。この青年こそ、後年言論の雄として、純真會議政治家として、天下に名声を馳せ、島田三郎その人であつた。先生が島田を知つたのは、実にこのときがはじめである。

先生等が協会に奔走してゐる間に、薩軍は熊本城に迫つた。精悍無比の薩軍はこれと一氣に陥れようと思つたが、城將谷干城は麾下三千五百の兵と城を堅く守り、一歩も外に出ずに戦つた。このことは「報知」にゐる先生は、早く「キングイハシロニヨツテボウセンニヤツシタ」旨の電報で報くされた。先生は沼間の宅に駆けつけて、

「どうだ、熊本鎮台は出て戦わないぢやないか」と詰りまると、沼間は頭をかいて苦笑した。

「こんな答ぢやなかつたが——」

という始末である。先生はもうあきらめた。こうなれば西郷軍の敗けるのは、火を見るより明らかである。折角の企ても遂に挫折してしまつた。この計画は輿論政府筋に知れて、二人は当然ブラックリストに載つた。沼間以後はこのことが累々反試して、遂に元老院書記官を論旨免職されてしまつた。(つづく)